

巻頭エッセイ

ロンドン再訪



神山文範

日本鋼管株式会社 鶴見事業所 艦船・修繕営業部 部長

昨年の9月、家族3人で1982年から4年間駐在したロンドンを再訪した。妻子にとっては実に15年振り、その後出張で数日滞在した僕にとっては正確には12年振りだが、ゆっくりと散策したのはやはり15年振りであった。

娘の大学入学の祝いであり、結婚20周年の記念の旅でもあったが、ロンドンを選んだのは、なによりも妻の英語の家庭教師であったリンジーとの約束があったからだ。妻にとってリンジーは家庭教師というより親友であり、駐在時代から家族ぐるみで親交を深めてきた。6年前にご夫妻で来日した際には多くの日本人弟子（皆ロンドン南西部に住んでいた駐在員の奥様で、妻は3番目の弟子とか）が大歓迎で同窓会(?)を何回か持たれ、1回は僕も出席した。我が家にも1泊していただき、紫陽花の明月院など鎌倉を案内した。1昨年には長女のリサが新婚旅行で日本に来たが、横浜と鎌倉を案内している。「今度は貴女が家族でロンドンに来ること」がリンジーと妻の約束であった。そんなわけで、思い切って休暇をとり出かけたのだった。

今回の旅行で15年間を感じさせない相変わらずのロンドンの良さを確認したが、一方でグローバリゼーションの波がロンドンにも押し寄せているのだろうか、その変化も強く印象に残った。例えば5日目の日曜日、リンジーとご主人のウィルが、住んでいたロンドン南西部の郊外をドライブしてくれたのだが、かなりの店が開いていたのである。日曜日といえばキリスト教では休日でもあり、15年前はニュースエージェント（新聞と軽い食物を売っている、日本のコンビニを古くしたような店）しか開いていなかったのだ。この驚きはキングストンにあるベントールズというデパートで頂点に達した。サリー州都の伝統的な地方百貨店だったのだが、桜木町のランドマークプラザを少し小さくしたような吹き抜けのあるショッピングセンターに一変していた。ファーストフードのレストランやブランド物の店で、若者だけでなく多くの老人が楽しんでいた。ウィル曰く「イギリス人も一度便利だと気が付くと止まらないものだよ」。

その後、ハンプトンコートを経て、住んでいたイシャーのリバーサイドドライブ（テムズ川の支流

モル川が裏庭の先を流れている）を訪れ、お世話になったお向かいのウィルソンご夫妻に挨拶した。小柄なご夫妻は彼らより背が高く育った娘に驚きながら、お返しとばかり当時大学を卒業したばかりだった彼らの一人娘スザンヌが結婚し、男の子2人のグランパとグランマになったと嬉しそうに孫の写真を見せてくれた。奥さんのシーラは、昔の我が家に今住んでいるアメリカンもいい人だからと紹介してくれた。親切にも裏庭に案内され、変わらぬモル川の流れと河畔の大きなプリティッシュオークと対面した。娘の記憶にも残っていたようで喜んでいたら、このアメリカンのご主人は、どうぞと家の中まで案内してくれたのにはびっくりした。車で通りかかった近所のアネットさんも、車を止めて「主人は2年前に亡くなったけれど私は元気よ」助手席の老友人とにこやかだった。住み始めて1ヶ月後のクリスマスにウィルソン家のパーティで初めて親しく話して以来、約3年間本当に楽しく過ごさせていただいたリバーサイドドライブの住人は年をとってはいたが元気で暖かく迎えてくれた。「家の前の桜が一本枯れたのよ」と教えてくれるくらい、ほとんど変わらぬ風景のなかで15年前に突然タイムスリップしたようだった。

そのようにして、瞬く間に8日目となり僕は一人先に帰国した。家内と娘はその後リンジー邸に3泊してパブや庭園などを訪れ、ロンドンを満喫して帰国した。僕が一人ヒースローを発って2時間後に、ニューヨークの同時多発テロがあったのもこの旅行を忘れられぬものとした。テロを無くすのは豊かさだとよく言われるが、精神的な豊かさを忘れてはいけないうらう。豊かなイギリスについてはリンボウ先生も書いているが、その源はベントールズやリバーサイドドライブで見たような大人たちの精神の元気さにあると僕は信じている。日本で始められる「ゆとりの教育」は小学生ではなく、まずは我々大人に必要なのではないだろうか。

さて、次はリンジーとウィルが日本に来る番で、昔取った杵柄で僕が日本の山を紹介することになっている。気が早いのだが、妻と今からどの山がいいかなと話しながら、僕たちも少し精神的に豊かになったかなと思っているところである。